

藏王堂の渡海船額

美術工芸研究室

美術工芸研究室が吉野町の依頼によって、昭和45年度に行なった吉野山の美術工芸品調査の収穫の1つである(口絵)。

この絵馬はかつて他の絵馬と共に藏王堂の外陣に掲げられていたものであろうが、現在は内陣の向って左側の通路にたてかけられている。豊274cm、中央で288cm横455cm、絵馬としては最大級のものである。周囲の縁は黒漆塗に桜花文の金銅金具を打ち、画面は板十二枚をたてにつなぎ、白土の下地を作る。絵は船に荷を積み上げ、降し、船上では宴を開き、岸辺では見物する人々を美しく描いている。余白には金箔をはり、下部中央より右側に奉納者約15名の名前を、右上部には万治四年(1661)の奉納銘を記している。

いうまでもなく、これは慶長年間から寛永年間にかけて行なわれた初期風俗画の系譜に属するものであるが、万治四年の年記を持つことは、寛永期の年記(寛永9年・11年)のある清水寺の末吉船、角倉船図額などと共に、初期風俗画の編年を行なう場合に重要な資料となるものである。

藏王堂は古来、熊野、木津川など船舶業者の信仰を広く集めていた。ここに記されている奉納者15名は、いま剥落により、すべての名前を知ることが出来ないが、中に「紀伊国屋小七郎」などの名前も見え、恐らく熊野の廻船問屋衆であり、その関係の資料としても貴重なものと思われる。

なお、判読し得られる氏名を記せば凡そ次の通りである。向って左より、堀内九郎兵衛、澤田屋弥兵衛、市口次郎兵衛、紀伊国屋小七郎、□中三郎□□、□(黄か)屋□□□門、□屋喜右衛門、□□屋□□、一人おいて原野善右□□、以下五名は剥落のため、ほとんど判読しがたい。この奉納者名は便宜上、比較的よく残る向って左、即ち末尾より記したが、奉納者列名の右端には前文のような別の字が書かれた痕跡が残っている。

(松下隆章)

第1図 藏王堂所蔵渡海船額(部分)